法華経にみる実践としての智慧

町田是正

目次

一　精神文化と智慧　　二　遥かなる佛智慧
三　法華菩薩行の実践　　四　実践としての智慧

一　精神文化と智慧

人類が出現して以来、人類と最も深く関わりをもってきたのは「宗教」である。後期旧石器時代に出現した現生人類は、種族間の集団的機能と不可欠の関係から、アニミズム・シャーマニズム・トーテミズムなどの原初的な宗教を生み出した・以来、人類は次第に次元の高い宗教を創成して精神文化の一翼を担ってきた。人類は宗教と深く関わることで、懺悔・瞑想・平和・慈愛・戒律・祈願・諦観・智慧などの宗教思想を具えることになった。その事が延いては、宗教々義の組織と体系化を促し、他方では教義の解釈に様々な異同を引き起し、また布教伝道の方途についても相違が生まれ、激しい論戦を展開し、時として激烈な斗争を繰り返し、更には政治・社会の問題をからめて民族の興亡に関与することもあった。

現今、キリスト教界における重要な論議の問題として、「グノーシス」(die Gnosis (D) 神智・神の認識）に対する取りくみの在り様がある。周知のごとく、「神の智慧」については、たとえば「コリント前書」には次のように教示されている。

神それを聖霊によりて我等に啓示し給えり。聖霊はすべて事を究め、神の深き所まで究むればなり（2ノ10）[注1]

即ち『新約』によれば、「神智」は人間の智慧や理性を超えた神秘の世界であるとしている。従って、人間が「神智」を知ることの出来る契機は、専ら神の側からの「啓示」(die Wahrheit (D) 黙示）によるとされている。「グノーシス」に関する論議は、人智を超えた問題であるために論点が定まらず、現今の趨勢としては、余りにも主知主義の立場を固持するグノーシス派との形而上の論議は敬遠することとして、専ら実践としての「神の智慧」を活かす方向に傾いているのが現情である。[注2]

次に仏教学と仏教史における「智慧」(Prajña (s)) の使用法をみると、智慧の意味合が多岐に分れている。かつて岩本裕博士は岩波文庫『法華経』(全三巻）の梵文原典からの訳出に当って細心の注意をはらった語彙は「智慧 jñāna」・「理智 prajñā」・「理性 buddhi」の三語であったと述懐している。[注3] そして仏教に於ても、今日的要請は単に深遠な教理としての「智慧」の義を享受することには終止符が打たれ、実践としての智慧の意義が求められる段階に至っている。

すでに周知のことではあるが、あえて付言すれば、「智慧」の実践の基盤となるのは、キリスト教に於ては「愛」(eine Liebe) の精神であり、仏教に在っては「慈悲」(die Barmherzigkeit (D)) の思想であることは云うまでもない。

「マタイ伝」の教示に次のようにみえる。

イエズス云い給う「汝、心を尽し魂を尽し思いを尽して主なる汝の神を愛すべし（22ノ37）。第二もまた同様なり、己れの如く汝の隣を愛すべし（22ノ29）

汝の隣を愛し汝の仇を憎むべし、と云えることを汝等きけり（5ノ43）。されど我は汝等に告ぐ、汝等の仇を愛し、汝等を責むる者のために祈れ（5ノ44）[注(4)]

右の教説は余りにも有名な「山上の垂訓」と呼ばれている一節であり、キリスト教の「愛」の精神を勧奨した原点である。

仏教に於ける「慈悲」の原点については、『スッタニパータ』の中に次のように説示されている。

あたかも母が己が独り子を命を賭けて護るように、そのように一切の生きとし生けるものどもに対しても、無量の慈（悲）しみの心を起すべし（一四九偈）

また全世界に対して無量の慈（悲）しみの意を起すべし。上に下にまた横に障害なく怨みなく敵意なき慈しみを行うべし（一五〇偈）[注(5)]

慈悲は、他人を尊重せよ。他人を軽視してはならない。他人と争ってはならぬ。他人を怨んではならない、という人間の崇高な行動の根底となる思想であり、菩薩行の基本思想である。

さて、イエズスの「愛」の精神は、パレスチナの茫漠たる原野と、迫害されたユダヤ民族の艱難辛苦の悲痛なる流浪生活の中から生まれた。また仏陀の慈悲の思想は、古代インドの身分差別と貧富格差の社会の中から生まれた。愛と慈悲という、この美しい精神は飽食の社会から生まれたものではない。私事になるが、想い起すことは一九七九年

西ドイツの修道院に滞留中、親身の接待役を務めてくれた修道士の口にした言葉が脳裏を去らない。

die Liebe nicht Spitzfindigkeit.

die Liebe ist das Handeln.

智慧は仏教を一貫する「最高の徳」（die Höchst tugend (D)）とされている。筆者は菩提の覚知（智慧）を求めて菩薩行に精進することの大事を学び得たいと願っている。

二　遥かなる仏智慧

法華経には三つの特筆する思想が説示されている。㈠は「開権顕実」（開三顕一・会三帰一）の語で示される一仏乗を開会する思想・㈡は「開近顕遠」（開迹顕本）の語で示される久遠実成の本仏（永遠の生命）思想。㈢は法師品から嘱累品にわたる諸品で勧説される菩薩行思想である。

開三顕一（会三帰一）の思想は、方便品において諄諄と説かれ、また法華七喩中の三車火宅・長者窮子・三草二木・化城喩・衣裏繋珠の五喩でも見事な善巧譬喩をもって説示されている。方便品の説相に従えば、一大事因縁と称せられる四仏知見（開示悟入）が説き明され、その後段に於て、仏陀は三回・四回と会三帰一の説示を繰り返すのである。

諸仏以方便力、於一仏乗、分別説三・舎利弗、如来但以一仏乗故、為衆生説法、無有餘乗若二若三、[注(7)]而為衆生、演説諸法、是法皆為、一仏乗故、[注(8)]隨其本性、以種種因縁、譬喩言辞、方便力故、而為説法、舎利弗、如此皆為、得一仏乗、一切種智故、[注(9)]

即ち「於一仏乗・分別説三」(tad evakam buddha-yānaṃ tri-yāna-nirdeśena nirdisanti (s)) の説語をもって繰り返している。声聞乗には四諦を説き、縁覚乗には十二因縁を説き、菩薩乗には六波羅蜜を説いて、三乗は各別に正覚を会得せしめるかのように解されるが、実はそれは「善巧方便」(upāyakauśalya parivarta (s)) であって、三乗すべて平等に一仏乗に帰一させることが本意であるとする。

さて会三帰一の思想が仏陀の本意であるとするが、方便品の前段に於て、その「一仏乗」(saddharma-eka-yāna (s)) と「仏智慧」(buddha-jñāna (s)) に到達する道程は遥かに遠く、深遠なる仏智慧は難解難入であると、注意を喚起しているのである。

告舎利弗、諸仏智慧、甚深無量、其智慧門、難解難入、一切声聞、辟支仏、所不能知。[注(10)] 仮使満世間、皆舎利弗、尽思共度量、不能測仏智、正使満十方、皆如舎利弗、及餘諸弟子、亦満十方殺、尽思共度量、亦復不能知…略…一心以妙智、於恒河沙劫、咸皆共思量、不能知仏智。[注(11)]

即ち智慧第一の舎利弗に向って、仏智慧は「甚深無量」(gambhira amita (s)) ・「難解難入」(durdrśaṃ duranubodhaṃ (s)) であって、例えば全ての声聞乗・全ての縁覚乗・全ての新発意菩薩などの智慧を寄せても、とても仏智慧には及ばない。それ程に仏智慧は深遠難解であるとする。

然し、仏陀はここで記別を与えるのである。

舎利弗、汝等當一心信解、受持仏語、諸仏如来、言無虚妄、無有餘乗、唯一仏乗。[注(12)] 我設是方便、令得入仏慧、未曽説汝等、当得成仏道、所以未曽説、説時未至故、今正是其時、決定説大乗。[注(13)]

智慧は独り仏陀のものではなく、当に万人すべてが仏陀の教えを信じ、その智慧を掌中にする実践の時に至ってい

るとする、会三帰一の大慈悲と絶対平等の思想が示されるのである。ところで何故に会三帰一の思想が繰り返して説かれるのであろうか。惟うに、声聞と縁覚の二乗に対して、文字通り「小乗」（劣った乗物 Hinayana (s)）「劣等」のレッテルを貼ることが目的ではなくて、小乗僧団が余りにも煩瑣な教理に拘泥し、知識偏重となり、かえって思想の固定化と保守化を招き、延いては僧伽の発展を自らが閉鎖することに対して、善巧方便をもって警鐘するところに会三帰一の本意があったのである。会三帰一（慈悲と絶対平等）の思想は、法華経の成立前には見られなかったものである。それは古代インドの宗教思想の変革であり、民衆が共有すべき思想的財産であったのである。

三　法華菩薩行の実践

大乗仏教の主役を演じたのは「菩薩」と呼ばれた人々で、その集団は「菩薩団」（bodhis-attva-gaṇa (s)）と呼ばれた。周知のごとく菩薩者としての要件は、「菩提心」（bodhi-citta）を起し、「菩薩行」（bodhisattva-carya）の慈悲利他の誓願を為し、「菩提行」（bodhi-carya）の実践にあった。

大乗菩薩団の中で、特に法華菩薩団は「舎利塔 dhātū-stūpa」（遺骨塔 tathagata-stūpa）の建塔と「僧団供養 saṃgha-puja」を否定する立場をとり、他方では「祠堂 tathagatam-caitiyam」（霊廟 caitya）の建塔供養する立場を堅持しながら、独自の求法運動として五種法師・六波羅蜜の実践を勧奨した。[註14]

法華菩薩団による僧団供養の否定、五種法師・六波羅蜜の実践運動は、仏教界における革新であったから、その運動は小乗僧団と激しく対立するところとなった。僧団側から驚異の目で見られ、異端視され、時には怒号・罵声・杖木の迫害に遭遇することがあった。対立と迫害の状況については、勧持品二十行偈に於て、「悪口罵詈 akrośaṃs

tarjanaṃs」・「加刀杖 daṇḍa-udgūraṇāni」・「擯出・遠離 niṣkāsanaṃ (s)」などの激烈な語彙をもって語られている。

此処で大事なことは、小乗僧団側からの迫害に対して、法華経では忍辱の鎧をまとい忍耐せよと勧説することである。

如来衣者・柔和忍辱心是。[15] 我等敬仏故・悉忍是諸悪。我等敬信仏・当著忍辱鎧。[16] 常行忍辱・哀愍一切・乃能演説・仏所讃経。[17]

法華経において「忍辱」(kṣamyate (s)) の精神を勧説するのは、忍辱心が弘教法軌の根幹だからである。忍辱行は六波羅蜜の一行であり、また「忍辱」(die Geduld (D)) の語には侮辱に耐えて宥し、忿怒心を起さないという語意が含まれているからである。即ち寛容と宥和の精神を培い、延いては慈悲利他行の根本とするところに仏教的意義がある。

法華菩薩団と小乗僧団との対立を具体的に示す事例として、常不軽菩薩の但行礼拝行の説示が知られている。その礼拝行の説示には、恣意と傲慢を絶対に宥さない菩薩行者の姿勢が教示され、激しい迫害に対する忍辱と不退の決定心が勧説されていよう。法華菩薩団に対する迫害が説示されていることは、菩薩団が他の僧団と対抗し、それを凌駕する勢力となって、歴史の表舞台に登場して活動したことを如実に語っていよう。

法華菩薩団は、部派仏教時代の「業 karman (s)」を「行 carita (s)」におきかえて、菩薩行と呼ばれる修行の法軌を整えていった。その修行の実践徳目が五種法師と六波羅蜜である事は云うまでもない。五種法師が法師品・安楽行品・分別功徳品・法師功徳品などで勧説されるのは、その法行徳目を修することで、仏智慧に至ることの要諦と

されるからである。また六波羅蜜が方便品・分別功徳品などで説かれるのは、その六つの実践徳目を修することで「最高の悟りに至る道」（parama bodhimarga (s)・das Heilspfad (D)）とされているからである。法華菩薩団は新しい仏教人間像の形成を目指したのであって、それは法行実践によって積み重ねた善根の功徳をもって、一切衆生に廻向利益を得さしめることにあったのである。

四　法華経にみる実践としての智慧

原始経典によれば、仏陀は教説の垂範に当って、先ず「縁起 pratitya-samutpada」の理法を根底として、「四聖諦 catur-ārya-satya」と「八正道 āryāṣṭāṅga-marga (s)」を説いて、智慧に目覚めること、そして智慧を実践することを勧め、それを仏教の出発点としたことが知られる。従って仏教は、本来的に智慧の宗教である。本節では法華経に焦点を合せて、諸品に示される智慧の語彙を摘出して、実践としての智慧の意味を考えてみたい。

序品（Nidāna-parivarto）

為求声聞者、説応四諦法、度生老病死、究竟涅槃、為求辟支仏者、説応十二因縁法、為諸菩薩、説応六波羅蜜、令得阿耨多羅三藐三菩提、成一切種智。[注18]

右の説示と同意文は常不軽品にも見える。[注19] 先ず声聞と縁覚に対しては、四聖諦と縁起の理法（分析的・論理的）をもって、人生無常と諸行無常なることを教え示し、それを克服すべき人生智を得さしめようとしている。また菩薩衆に対しては、六波羅蜜（直観的・実践的）をもって仏智慧を悟らしめようとしている。なお「一切種智」（sarvajña-jñāna）の語彙は方便品・薬草喩品・法師品などにも見えるが、[注20] 一切種智とは一切の事象の全体像（平等）と個別像

（差別）を合せ知る仏智慧のことで、特に実践としての智慧であることが説示されている。

方便品（Upāya-kauśalya parivarto）

諸仏智慧、甚深無量、其智慧門、難解難入、一切声聞、辟支仏、所不能智。[21]

この説示は前節でも言及した如く、仏智慧の世界は遥かに遠く、声聞や縁覚の知恵を寄せ集めても測り知ることの出来ない深遠難解であるとする。さて、大事なことは、仏智慧が遥かに遠い世界であるならば、その困難な道程を克服していく実践がなくてはならないことである。

方便品は末尾において、仏智を求めて実践することの功徳を次のように讃歎している。

有慙愧清浄、志求仏道者、当為如是等、広讃一乗道……其不習学者、不能暁了此、汝等既已知、諸仏世之師、隨宜方便事、無復諸疑惑、心生大歓喜、自知当作仏。[22]

釈尊は方便品で諄諄と説示してきた会三帰一（一仏乗の無限の功徳）については、方便品以下の諸品においても、巧妙な譬喩をもって語るであろうから、疑念を棄て、疑惑を去り、素直に説示を聴聞して、仏智慧の境界に入ることの法悦を享受せよと讃歎している。

譬喩品（Aupamya-parivarto）

若有衆生、従仏世尊、聞法信受、勤修精進、求一切智、仏智、自然智、無師智、如来知見、力無所畏、愍念安楽、無量衆生、利益天人、度脱一切、是名大乗、菩薩求此乗故、名為摩訶薩。[23]

此処では四智が示されるが、その中の「自然智」とは、生死の業火に苦悩する衆生を救済しようとする大慈悲を自然に惹起せしめる智慧のこと。「一切智」とは、すべての個別相（差別）を総体的に把握する智慧（一切の法に通達

した智慧）、つまり仏智慧のことである。譬喩品で四智を説くと云うことは、全ての人々が平等に仏智慧に至ることが出来る道を開示しようとしたものである。

薬草喩品（Oṣadhi-parivarto）

以智方便、而演説之、其所説法、皆悉到於、一切智地、如来観知、一切諸法、之所帰趣、亦知一切衆生、深心所行、通達無礙、又於諸法、究尽明了、示諸衆生、一切智慧。[注24]

「一切智地」（sarvajñā-bhumi）とは、すべてを知り尽す知慧の基盤のことで、その教示する意味は、知識は断片的であってはならぬ、組織的・体系的に修学する事の大切さを示唆している。殊に「智地」と示す事は、諸学を体系づける能力知（哲学する力）の確立を指していよう。

右の薬草喩品の説示を意訳してみると、仏智慧は衆生の心の動き（求道心・善悪心・執着心）、また衆生の未来の姿を見通す能力を具えており、更には衆生の千差万別の機根（六識・五蘊）を見通す能力があり、巧妙な方便を用いて教化するであろう、としている。

五百弟子受記品（Pañcabhikṣusata-vyaka-raṇa-parivarto）

又於諸仏、所説空法、明了通達、得四無礙智、常能審諦、清浄説法、無有疑惑、具足菩薩、神通之力。[注25]

「無礙智」（pratisamvid-jñāna）とは文字通り障礙が無く自在に法を説き得る智慧能力のことで「無障智」（anāvaraṇa-jñāna）とも云う。[注26] この無障智を基準として、四つの無礙智—法無礙智・義無礙智・辞無礙智・弁無礙智—が説かれている。要は仏智慧は深遠無量であり、無限の智慧能力を具えているとする。

従地涌出品（Bodhisattva-prthivi-vivava-Samudgama-parivarto）

当精進一心、我欲説此事、勿得有疑悔、仏智叵思議、汝今出信力、住於忍善中、昔所未聞法、今皆当得聞、我今安慰汝、勿得懐疑懼、仏無不実語、智慧不可量、所得第一法、甚深叵分別、如是今当説、汝等一心聴。[注27]

右の説示は弥勒菩薩に対して教示したもので、仏智慧は「仏智叵思議」(acintiya jñāna tathagatanā)・「智慧不可量」(jñānaṃ maka-ci saṃkhya)・「甚深叵分別」と示して、理性による分析、思惟を超越した悠遠の世界だとしている。従地涌出(大地の裂目から出現)して、永い歳月、小乗僧団とバラモン教団の底辺にあった菩薩団が、ようやく古代インドの歴史舞台に躍り出た、その菩薩衆に向って菩薩行の実践を勧奨しているのである。

◇◇

右に摘出を試みた以外の諸品中にも、智慧に関する語彙と実践を勧説した説示が多々あることは云うまでもない。殊に仏智慧を説示するときは最上級の形容修飾語を冠している。

智慧の実践を勧説する説示として、化城喩品において、

為仏一切智、当発大精進。以無量因縁、種種諸譬喩、説六波羅蜜、及諸神通事、分別真実法、菩薩所行道、説是法華経、如恒河沙偈。[注28]

と示している。この説示は大通智勝仏の前世と修行の故事に寄せて「仏の智慧を得るために勝れた勇気を湧き立たせよ」と勧説し、限りない譬喩を示して、神通力の智慧を縦横に発揮して、菩薩衆が実践すべき六波羅蜜の徳目を示すとしている。

また分別功徳品によると

況復有人、能持是経、兼行布施、持戒、忍辱、精進、一心、智慧、其徳最勝、無量無辺、譬如虚空、東西南北、

四維上下、無量無辺、是人功徳、亦復如是、無量無辺、疾至一切種智。[注29]

と示して、六波羅蜜を実践することを讃歎し、菩薩行を修する勇猛心を鼓舞している。法華経が智慧の実践を勧説するのは、娑婆の苦海に苦悩する衆生をして、諸行無常を洞見する智慧を修めさせようとする慈悲の発露である。

日蓮聖人は智慧と菩薩行の相関を会通して『観心本尊抄』で次のように教示されている。

無量義経曰雖レ未レ得レ修二行六波羅蜜一六波羅蜜自然在前等。私加二会通一如レ顯二本文一雖レ爾文心者釈尊因行果徳、二法妙法蓮華経五字具足我等受二持此五字一自然讓二與彼因果功徳一。[注30]

日蓮聖人は御自身の法華経色読（五種法師と六波羅蜜の実践）を踏まえられて、無量義経を釈され、有名な三十三字段（自然譲与段）の授記の功徳を教示される。即ち無量義経の「六波羅蜜自然在前」の文意は、単に経文の字義として受けとめるのではなく、道場内の修行と社会的実践を兼ね備えた事行として享受すべきことを勧奨されたものである。六波羅蜜を修することで理の一乗観法（理としての智慧）が生れ、「妙法五字ヲ受持スレバ」理の十乗観法が超克（仏智慧を求め菩薩行を精進する）されて、此処に観念として智慧が打破されて、実践としての仏智慧へと昇華されることを垂範されたのである。

実践としての智慧が今日的要請であることは確かである。智慧について「あれや・これや」（sie überlegt hin und her (D)）と思いをめぐらす時代ではない。法華経における実践としての智慧は、時間の壁を超えて、民族の壁を越えて、人類救済の灯であることを確と受けとめていきたい。

注

(1) New Testament: the First epistle of Paul the apostle to the Corinthians. Chappter2. verse10・11. (Jappn Bible Society)

(2) 「グノーシス」に関して、新たなる国際的動向の一事例として、一九八八年七月上智大学東洋宗教研究所を会場として開かれた「Dialogue Symposium: Wisdom and Compassion-The massage of Buddhism and Christianty for Times」の国際学術会議の成果を簡略紹介しておこう。本会には内外の研究者—宗教・教育・哲学・言語・文学・神学・社会の七〇名—が智慧と慈悲の現代的意義を探し求めた四日間であった。白熱した論議のなかで、「グノーシス」に関しても形而上・神秘性の問題が討議されたが、結局、今日的状況下では神秘性の問題を討論する事に意義は無いとして、むしろ実践としての「グノーシス」を問う努力こそがキリスト者全体の姿勢であるとの認識の確認がされた。

(3) 坂本幸男・岩本裕訳注『法華経』(岩波文庫) 所収・岩本裕「あとがき」(上巻四〇四頁)

(4) New Testament: St. Matthew-Sermon on the Mount-Chappter22.verse37・39, Chappter5. verse43・44 (Japan Bible Society)

(5) Sutta-nipāta: Metta sutta 144・150。中村元訳『ブッダのことば』岩波文庫三八頁。

(6) 坂本幸男・岩本裕訳注『法華経』岩波文庫 (ワイド版) 上巻・方便品九八頁。以下本書は「法華経・○巻○○品○○頁」と略す。尚、法華経の語彙を確認するうえから「Suddharmapuṇḍarika-sutram: by prof. U.Wogihara and C. Tsuchida. 1958. the Sankibo Buddhist Book Store」を併せ参照した。

(7) 法華経上巻・方便品九〇頁。

(8) 法華経上巻・方便品九四頁。

(9) 法華経上巻・方便品九六頁。

(10) 法華経上巻・方便品六六頁。

(11) 法華経上巻・方便品七二頁。

(12) 法華経上巻・方便品一〇〇頁。

(13) 法華経上巻・方便品一〇四頁。

(14) 法華経・分別功徳品に「如来滅後、若有受持読誦、為他人説、若自書、若教人書、供養経巻、不須復起塔寺、及僧坊、供

養衆僧、況復有人、能持是経、兼行布施、持戒、忍辱、精進、一心、智慧、其徳最勝、無量無辺」（下巻六〇頁）。とあり、他方、如来神力品には「於如来滅後、応当一心、受持、読誦、解説、書写、如説修行…略…若於園中、若於林中、若於樹下、若於僧坊、若白衣舎、若在殿堂、若山谷曠野、是中皆応、起塔供養、所以者何、当知是処、即是道場」（下巻・一六〇頁）とあり、分別功徳品では「不須復起塔」（塔 dhātu-stūpa）と示し、神力品では「起塔供養」（塔 caitiya）と説き、建塔供養の相違を明確にしつつ菩薩団の求法運動を展開していった。

（15）法華経中巻・法師品一五八頁。
（16）法華経中巻・勧持品二三八・二四〇頁。
（17）法華経中巻・安楽行品二七四頁。
（18）法華経上巻・序品四〇頁。
（19）序品に見られる説示は、常不軽菩薩品に於ても全く同意文で「為求声聞者、説応四諦法、度生老病死、究竟涅槃、為求辟支仏者、説応十二因縁法、為諸菩薩、因阿耨多羅三藐三菩提、説法六波羅蜜法、究竟仏慧」（下巻一三〇頁）と説示されている。
（20）「一切種智」の語が見えるのは、方便品（上巻九二頁）。薬草喩品（上巻二七〇頁）。法師品（中巻一四八頁）等々。
（21）法華経上巻・方便品六六頁。
（22）法華経上巻・方便品一三二頁。
（23）法華経上巻・譬喩品一七八頁。
（24）法華経上巻・薬草喩品二六四頁。
（25）法華経中巻・五百弟子受記品九四頁。
（26）「無礙智」については、化城喩品（中巻一四頁）でも説示される。
（27）法華経中巻・従地涌出品三〇六・三〇八頁。
（28）法華経中巻・化城喩品九〇・八二頁。
（29）法華経下巻・分別功徳品六〇・六二頁。
（30）観心本尊抄・昭和定本遺文七一一頁。

（平成七年十月三日）